

琉歌の選択と参考文献について

ここでは、児童、生徒など学習者向けの教材となることを想定して歌詞を選択し、書き方の新旧対比をしました。歌詞の意味の説明は先生方に一任します。学習者の年齢に幅があるため、歌詞によっては若年児童に不向きなものもありますが、歌詞の選択も先生方にお願ひすることになります。

参考文献としては、各地の歌碑を含め数多く目を通しましたが、一つの歌でも書き方は、文献ごとに異なることが多く、話し言葉の書き方が多様で不統一であることに負けず劣らず、広く拡散しています。文字遣いが部分的に現代式であったり、拗音に小書きがあったり、字体や書体はまちまち、言葉そのものが違うなど、誠に様々です。したがって、文庫で取り上げた歌の“伝統的”な書き方は一例に過ぎません。そのような事情から、一つの文献からそのまま引用した琉歌は、ほとんどありません。

歌詞の本来の書き方はどうかといえば、詠んだ人が書いたものというのが、現在の著作権法的な感覚ですが、昔は著作権法はなく、そういう感覚にも乏しく、活字もなく、文字や文字遣いも現在と異なり、どれが本来なのかの判断は困難です。また、過去には、後代の人々が原詞を模範として文字や文字遣い、言葉さえも変えていくことに問題意識がなかったようです。むしろそれが琉歌の継承と繁栄に寄与しているようにさえ思えます。

この文庫は文献なしでは作れません。よく参考にした文献ばかりでなく、納得できずに見送った文献も、それなりに役に立っているという意味で全部が参考であるといえますが、文献を個別に多く表示することは困難です。

表記が多様であっても、読み方、声の出し方は本来、詠み人が詠んだ詠み方によるべきで、唯一通りである筈です。細かく考えれば、時代の変遷による音声の変化はありうるし、後代の識者によって文字表記が多様化されるのに伴う読みの変化もあると思われませんが、声の出し方の変化は、あったとしても文字表記の多様化に比べれば、少ないと思います。

歌詞の文献は、ほとんどが日本語の文字で書かれていて、しかも言文不一致、どう読むのかの音声指示はほとんどありません。琉歌に詳しい人には支障はないようですが、学習者にとって一番大切な読みの“声”の表示が、ほとんどの文献に欠けています。その意味で「標音評訳琉歌全集」(島袋盛敏、翁長俊郎、武蔵野書院、1968年)と「琉歌大成」(清水彰、沖縄タイムス、1994年)は、書き方というよりも、声の出し方の指定があり、文庫はこれらに多くを頼ることとなりました。しかし、この二書においても同じ歌の表記、標音は必ずしも一致していません。

ついでに、琉歌を選ぶのに困った例を示しておきます。例えば、「三重城にのぼて・・・」の中の言葉に、ある文献では「早船」とあり、別の文献では「走船」とあります。また、「栄て行く中に・・・」の中には、ある文献では「実る」とあり、別の文献では「よかる」となっています。どちらが正しいか、それぞれ言い分があるでしょうが、正しい判断は詠み人がどう著わしたか、つまりオリジナルがどうであったかによるべきです。しかし残念ながら、それは分かりません。